

【高齢者の現状 13】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

(8) 活動範囲の環境

行政が健康づくりを進めていますが、自分の身近に置いてどういう取り組みを行っているのかがわかりますか、その情報はどうしたら手に入れることができ、どう活用することが良いのかを確認できますかを考えてください。

行政は、生命を守り、生活を守り、生活を輝かせ、尊厳を持って生きることができることについて、どんな取り組みを実施しているかです。

厳しい財源の中で、行政としてどういう生活を住民に保障するのかをはっきりさせて住民に情報提供しているのかも確認する必要があります。また、その取り組み状況を分析したものが理解できるようになっているかです。

どんなものを行政が取り組んでも、その内容が関係者に情報が提供され、その利用方法が解かるようになっているかです。確かに個人においても情報を手に入れることに前向きに取り組む必要がありますし、客観的なものの捉え方をする必要がありますが、個人によってその環境が異なるということを行政が理解することが必要です。

環境の大きさは、行政が代表的なものでありますが、家族、地域なども大きなウエイトを占めるものですから大切にしてください。その内容を理解し、予測することも重要な課題です。

個人としては、生きる権利と義務がありますが、その捉え方に多くの個人差が存在することも事実ですので、難しい面もあるとは思いますが、前に向かって生きることが楽しいという発想を持ちたいと願っています。

日常生活を考える中で、自分自身の活動範囲がどうなるのかで気持ちが変わってきますし活動範囲にも影響が生じます。70歳を過ぎてからの範囲、心身ともに少し疲れた状態での範囲、介護をするか・されるかの状態での範囲には大きな差が生じます。活動範囲の変化をどう捉え、どう理解し、日常生活の中でその変化を受け止め、適切に対処しているのか、何気なく生活しているのかでは、人生の楽しみ・生きがいはどこかで大きく変わってくるものと思います。

個人の問題は、いろんなことが想定されますが、その内容が理解されないところが多いかも知れません。それでも考えることは大切な義務であり、権利ですから検討し、何が理解できないのか、何が予測できないのかななどを整理することから始める必要があります。

自分自身の将来について、自分で責任を持って、人に大きな影響を与えないように対応するには、どうしたらよいかを考える必要があります。